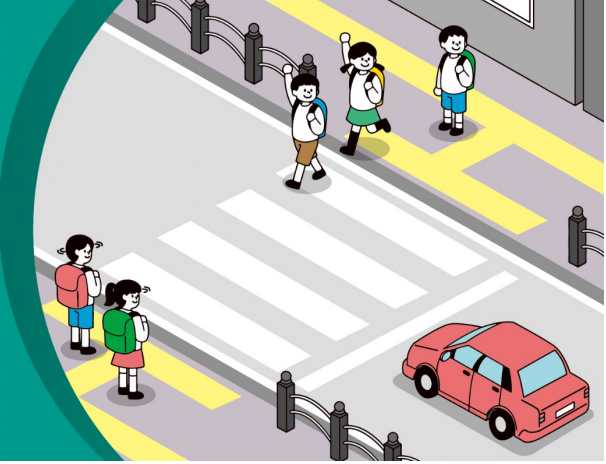


自動車安全運転 シンポジウム2021

子供の交通安全—子供の視点から見た安全確保

開催報告



1. 開催概要

- テーマ 自動車安全運転シンポジウム2021
子供の交通安全—子供の視点から見た安全確保
- 開催日時 2021年11月9日（火） 14：00～15：50
- 開催方法 YouTube Liveでのオンライン配信（事前登録制・参加費無料）
- プログラム
 - 14：00 開会挨拶 種谷良二 自動車安全運転センター理事長
 - 14：05 講演①「通学路Vision Zeroの実現を目指して」
講師 久保田 尚氏 埼玉大学大学院理工学研究科 教授
 - 14：20 講演②「チャイルドシート（CRS）と小児の交通事故被害について」
講師 植田育也氏 埼玉県立小児医療センター
小児救命救急センター長
 - 14：40 講演③「真実にものさしをあてる」
講師 岩貞るみこ氏 モータージャーナリスト
 - 14：55 講演④「警察における子供の交通安全対策について」
講師 遠藤健二氏 警察庁交通局 調査官
 - 15：05 休憩
 - 15：15 パネルディスカッション
「子供の交通安全—子供の視点から見た安全確保」
コーディネーター：岩貞るみこ氏
パネリスト：植田育也氏、久保田尚氏、遠藤健二氏
 - 15：50 閉会
- 配信拠点 一橋大学 一橋講堂（東京都千代田区一ツ橋2-1-2）
- 主催 自動車安全運転センター
- 後援 警察庁

2. 講演概要

以下の4件の講演とパネルディスカッションを行った。

講演①「通学路Vision Zeroの実現を目指して」

講師 久保田 尚氏 埼玉大学大学院理工学研究科 教授

通学中の子供が犠牲になる悲惨な交通事故が後を絶たない。わが国の交通安全 対策として、「まず、通学路の事故を根絶する」ことを意図した「通学路Vision Zero」を提唱し、その実践に取り組んでいる。近年、わが国のこの分野の対策に急速な進展がみられる。ハンプ等の物理的デバイスに関する国のガイドラインが平成28年に制定されたことが非常に大きな意味を持つ。また、欧州で普及しているライジングボラード（自動昇降式の車止め）の公道設置もはじまった。歩車分離信号やゾーン30も普及してきた。さらに、ゾーン30と物理的デバイスを組み合わせるゾーン30プラスも今年度スタートした。

これらの手法メニューをどのように使いこなすかが、今後最も重要となる。われわれは、通学路Vision Zeroを実現する具体的手法として、通学路総合交通安全マネジメントを提案している。すなわち、道路管理者、警察、学校関係者、そして地元住民が一堂に会し、ワークショップ形式で自由な議論を行い、対策について議論して頂くものである。講演では、その事例として、通学路にソフトライジングボラードなどを設置した新潟市日和山小学校と、学校の正門前にスムーズ横断歩道（横断歩道ハンプ）を設置した浦添市港川小学校の事例を紹介した。今後、全国に普及し、事故の根絶を実現することを強く期待したい。

講演②「チャイルドシート（CRS）と小児の交通事故被害について」

講師 植田 育也氏 埼玉県立小児医療センター 小児救命救急センター長

本邦では2000年から6歳未満のCRS着用が義務化されたが、その着用率は7割程度に留まっており、不適正着用が多いことが報告されている。今回、CRS着用と外傷の重症度について検討した。

【目的】

小児交通外傷症例について、CRS着用の有無およびその適正性と、重症度との関連を検討する。

【方法】

研究デザイン：単施設、後方視的研究

期間：2017年4月～2019年12月(2年9ヶ月)

対象：当院に搬送された、車両同乗者としての交通外傷患者のうちの入院症例について、診療録を用いて後方視的に検討した。

【結果】

該当症例は12例。年齢分布は1ヶ月～4歳。うち乳児が6例と半数を占めた。傷病名は頭部外傷が最も多く、腹部臓器損傷、長管骨骨折がこれに続いた。

【考察】

警察庁/JAF基準でのチャイルドシート適正着用群と、非使用+不適正着用群との比較では、重症度に有意差は見られなかった。チャイルドシート適正着用群と不適正着用群のみの比較でも、重症度に有意差は見られなかった。

今回の検討は入院症例に限定されたものである。CRSを適正着用し、外傷を免れ、外来診察のみで帰宅した症例も数多く存在するため、それらも加えて再検討を行う余地がある。



講演③「真実にものさしをあてる」

講師 岩貞 るみこ氏 モータージャーナリスト

2020年4月にチャイルドシートの着用が道交法で定められた。当時はチャイルドシートの存在すら知られていなかったため認知させることを目的のひとつとし、市民にわかりやすく「6歳未満に着用義務」と定められた。しかし、20年以上が経過して広く認知された今、「必要な体格の子どもに適切に着用させる」を目的にする時代がきたといえる。大人用のシートベルトは車両を購入すればそのまま使えるのに対し、子どもを守る命綱であるチャイルドシートは、保護者の装着方法で安全性が大きく左右される。また、高速道路上ではシートベルトの全席着用義務により、6歳以上の子どもたちが大人用のシートベルトを首にかけられ、事故時はシートベルトが凶器になる恐ろしい状況で使われている。世界をみても、多くの国が年齢ではなく体格、特に身長で基準を作っている。市販されている車両の多くが、140cm（車種により異なる）以下の体格にはシートベルトでは対応できないと明記していることから、6歳～140cm以下の子どもを守るための対策は急務である。「小学生以下に着用義務。シートベルトで対応可能な身長の場合は免除」とするなど、市民が理解しやすく有効な道交法への改正を強く求める。

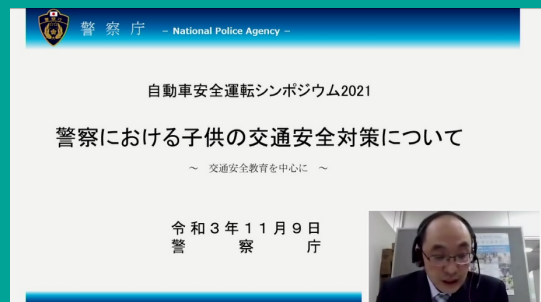
講演④「警察における子供の交通安全対策について」

講師 遠藤 健二氏 警察庁交通局 調査官

我が国における子供の重大事故の発生状況を概観した上で、警察が行っている交通安全教育に係る取組を紹介した。

子供の死亡事故は、他の年齢層に比して大きく減少しているが、国の宝である子供の事故は1件でも減らす努力が引き続き重要。交通安全教育について、警察は幼児児童に対し年間590万回（令和元年）実施しているほか、民間組織で行われている教育の促進を図っていること。さらに、自治体、学校等が、交通安全教育指針に基づいて実施していることから、多層的な主体による均質的な教育が実施される体制が整っていること。子供、保護者等が定期的に教育を受けられるよう、関係部局とのより一層の連携が必要となることを説明した。

また、警察で特に力を入れている歩行者の安全な横断方法、自転車用ヘルメット、シートベルト・チャイルドシートの着用促進など「自分の身は自分で守る」参加・体験・実践型の教育や、コロナ禍で普及したSNS等を活用した対面によらない教育の現況を紹介したほか、都道府県警察の好事例（VR、ウェアラブルカメラを用いた教育等）を紹介した。



パネルディスカッション

「子供の交通安全—子供の視点から見た安全確保」

コーディネーター: 岩貞るみこ氏

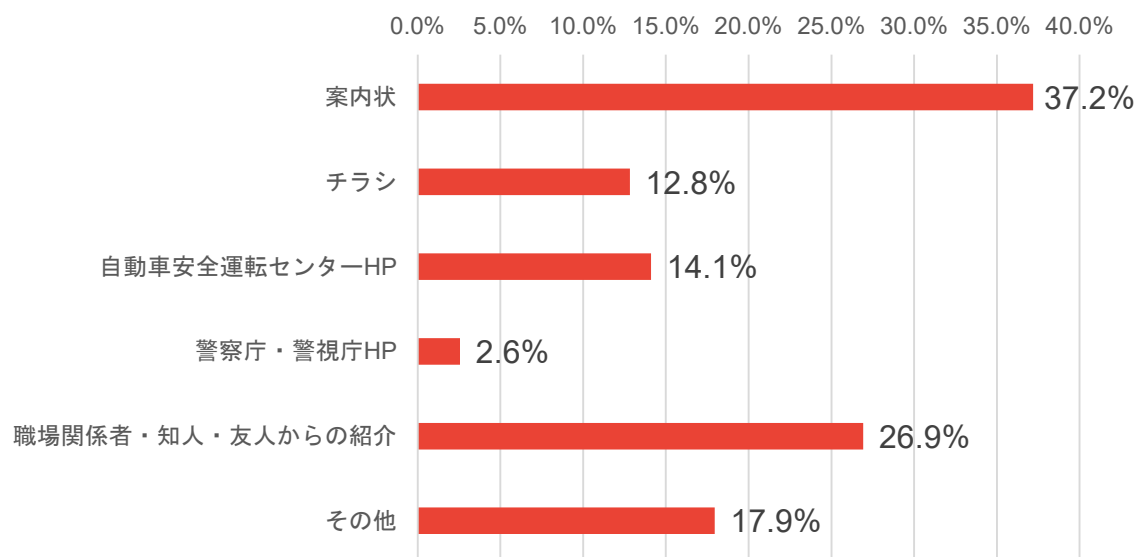
パネリスト: 植田育也氏、久保田尚氏、遠藤健二氏



3. アンケート結果（抜粋）

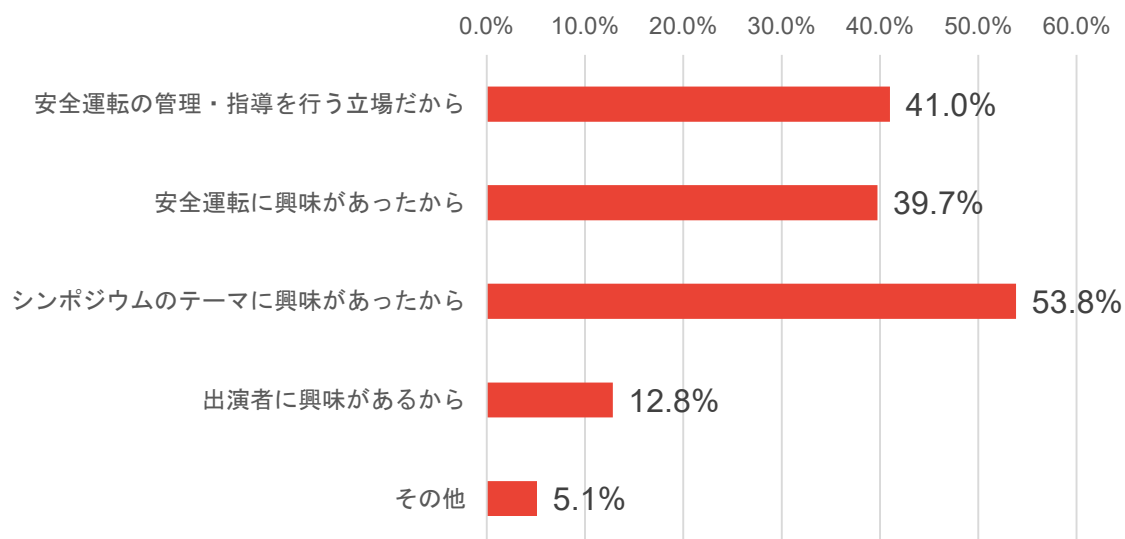
総回答数78件

（1）今回のシンポジウムを何でお知りになりましたか（複数回答）



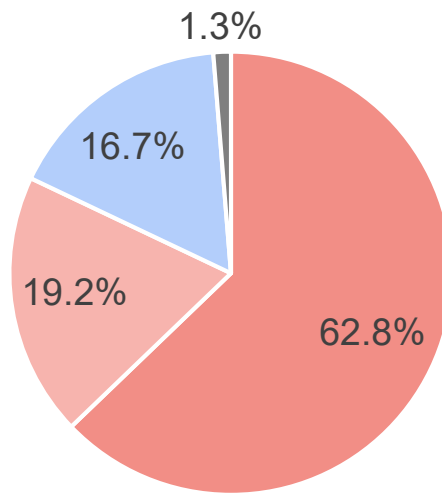
(n=78)

（2）シンポジウムに出席された動機をお聞かせください。（複数回答）



(n=78)

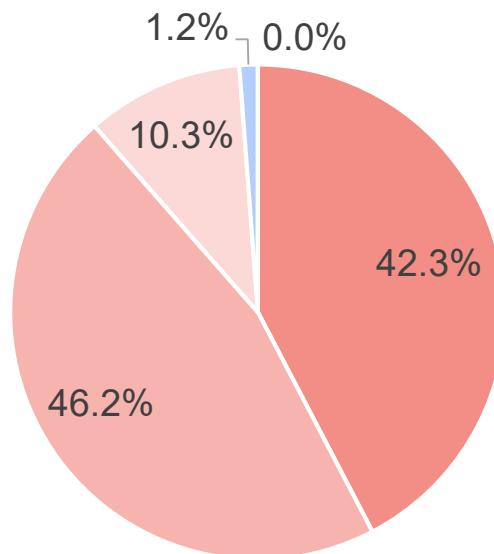
(3) シンポジウムに参加してどのように感じましたか (択一)



- 子供の交通安全に対する興味が強くなった
- 子供の交通安全に対する興味がやや強くなった
- 子供の交通安全に対する興味は変わらない
- 不明

(n=78)

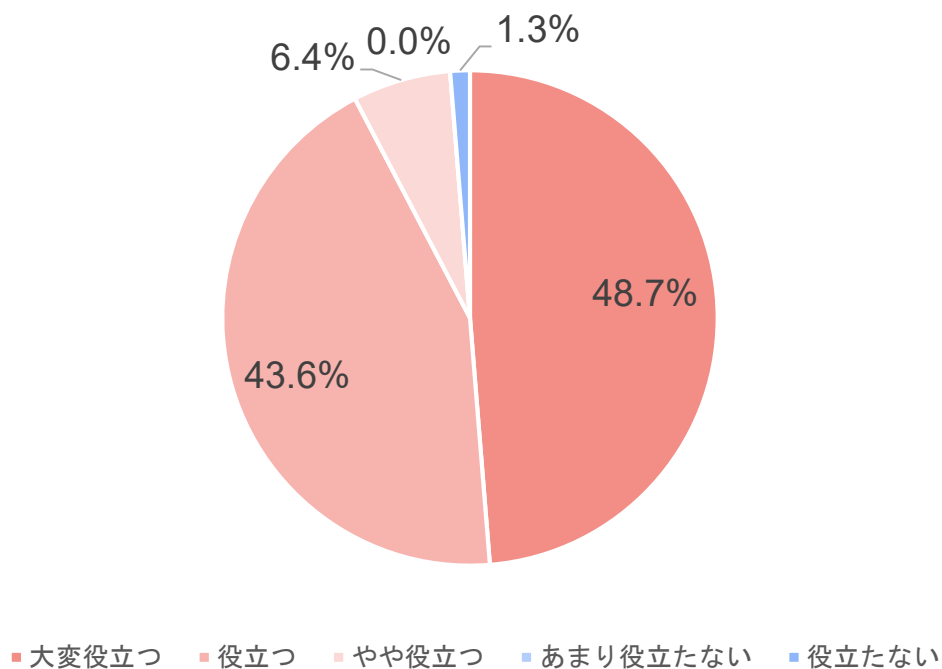
(4) シンポジウムの内容はあなたにとって役立つものでしたか (択一)



- 大変役立つ
- 役立つ
- やや役立つ
- あまり役立たない
- 役立たない

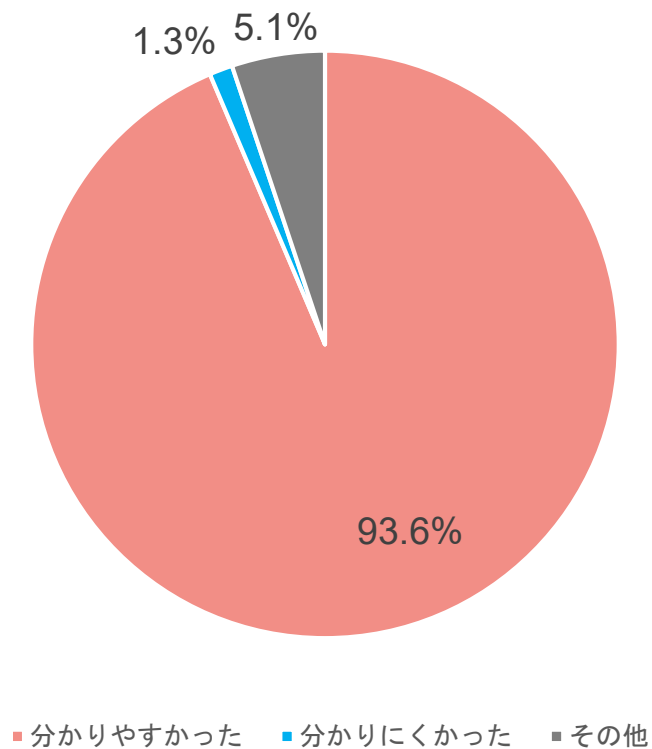
(n=78)

(5) シンポジウムの内容は社会全体にとって役立つものでしたか (択一)



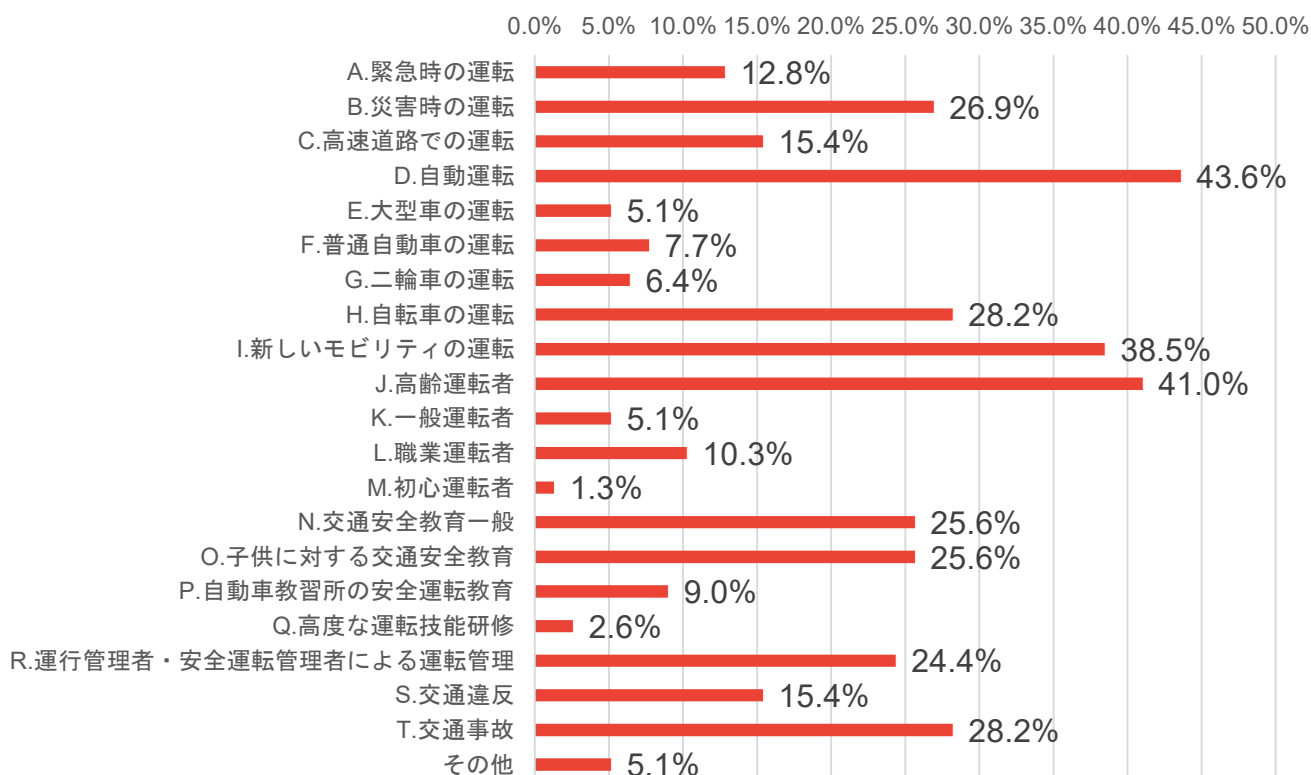
(n=78)

(6) シンポジウムのオンライン開催についてご意見をお聞かせください (択一)



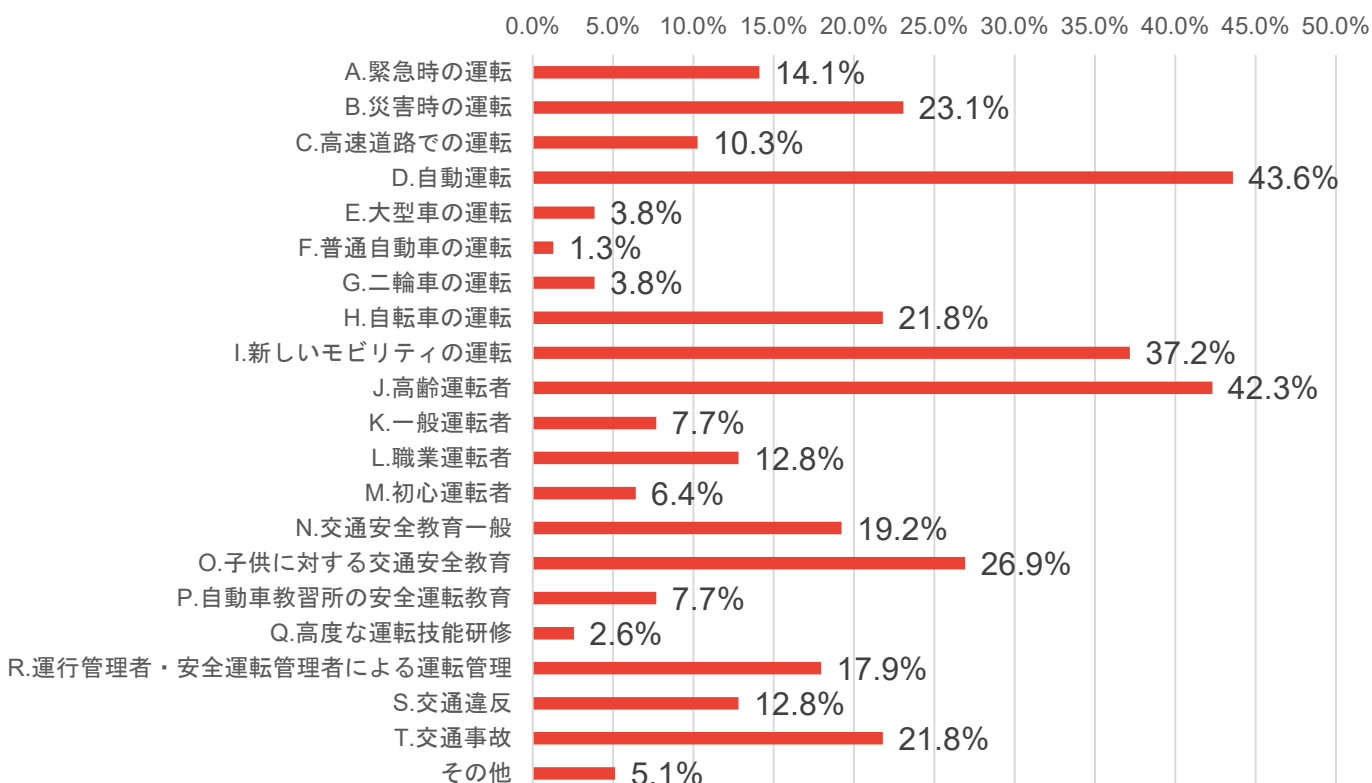
(n=78)

(7) シンポジウムで特に取り上げてほしいテーマをお聞かせください (複数回答)



(n=78)

(8) 今後センターが安全運転の取り組みを推進していくうえで、実施すべきと考える調査研究がありましたらお聞かせください (複数回答)



(n=78)